繪本豐臣勲功記

七編
四

へ凉13
2209
64

門へ遠13
2209
巻 64

繪本豊臣勲功記七編巻之四　目錄

山路隱謀露頭徒逃大坂　屬一族爍刑
今井角右衛門密意と見せて蜂須賀を助る図
山路將監大坂を逃退図
山路の親屬天女の罰と蒙る図
盛政与正国謀政中入軍　屬勝家大制

佐久間の舅兵條吾の渕辺ヲ馬主を斬る図

盛政定謀計相進大岩山 属 中川烈戦

盛政猛憤の図

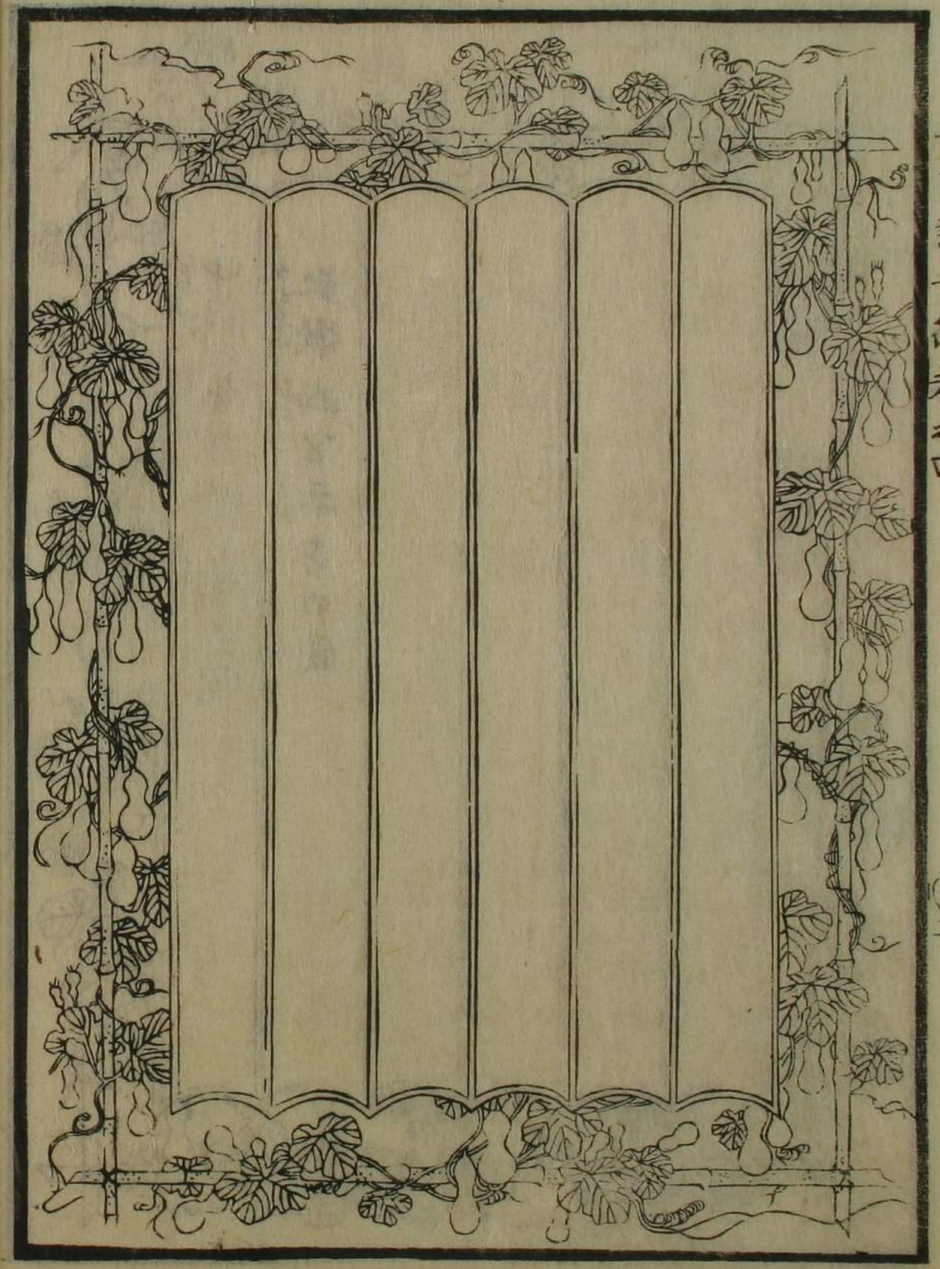
壁越の陰を用ゐる図

中川兄弟戦死千大岩山 属 凱歌示凶

佐久間の兵士抱炬の図

中川兄弟戦死の図

凱歌凶を示さの図



繪本豊臣勲功紀七編卷之四

江戸　櫻澤堂山　編輯

山路弾正露顕徒逃大杉屬一族殲刑

梵唄ハ説と聽。一狸ありくロと猛く嵐と窺ふ。鼠子ハうく穴より出るを。狸ちらちこれを呑。嵐子腹ハ入く獨居ハり。反く狸の膳膳を食ふ。狸憲痛逆悶く狂走く遂に命の終るハ至る。是其欲心身命を損ずるの譬と爲るか。山路將監正國も。彼狸が嵐と食ふよ等し。豈畏くらざるんや。然るにハ將監ハ愚ハも宇野ハ説臨され。後時ハく熟く思ふ事ハく。吾今柴田ハ帰参せんハ。何をぞハ一の功と達ぜんべかるべくんぞ。ハ事ハ却く説功ハ

経ハ狸と
ハ描くべし
一描を
呼て家狸
とハいべく

父子と木村が首を擒捕る。（二将ハ同じ大和に在べあり）其を縷頭ふ為さんと
ものどもいづれも武勇の輩あれば。有活ふい料理がうと又
ふ〜〜蔭び深為ふ。為ふ過つるころ長演ふく。新ふ抱
一一今井角右衛門野村市助とつふ者あり。新参ふ似もやう
を万事ふ速達つるやう。彼盟も殊ふ情を懐。身近ふ
給仕せしせけるが。密ふ両人を近く招き。吾ふ一大特の密
譚あり何ふ倚らを両人ともふ。将心ひとへ給るべーと謂と
市助。角右衛門。俺們新参ありとゆへども。平日厚恩を被ふ
らものを何をか遠背はらずつるべき。先〜命聆られんと言ふ
正図うち欲び。特むべき事除の義ふ有べし。二人の命と賜ふ
まーきやいろもの〜と鞠問を両人思彼ふき詞ふ驚とせーと

竺も傷せば。甚い何事ぞ知ら給ぐも。所用ふ達こそ如意なる。
所ふ寧きもんの様〜。随ふ一命賭よべーと。要ふ将盟宋
安途ー。遠よい狐疑あれども。他言ふもべき誓書をべーと
嬉く準備の牛王を把出。今井。野村が家よりき。墨筆紙
ふ〜れば。素より覚朝の今井。野村。筆硯把く姓名を紀書。
爨信所て及望ふ承来今井。野村の二人ハ。秀吉卿その報。
山路が心底を察量ふ。是欲深〜ーて義信を弱んー。弥
智ある輩と知ーめられ。今井。野村を間者ーて。属屋ふる
両人ふ。将盟それふ義ふも激らを。這態を視く大ひふ
欲び。誓書を把く巻投め。二人ふ驚〜詞と密め。昨夜故将
楽田勝家。昔時の好を忘ものーて。深〜勤力と特誠あり

吾北国へ送るにおいては。後来勝豊が領しける。丸岡十二万斛と賜らるべき約束なり。各も領へ知へ如く各素柴田の旗下なりしかども。勝豊反心せしかよりて。領地を得ざ羽柴に属せり。本意なしと思ふところへ。這遣勝家密使とものべ。吾を召さる。最も切なり。疑ふ惜べきこの事なり。這地を去んとおもひしかども。寸功もなく所容なくと。柴田が許へ帰らんこと。武勇を覚ふきふ似たり。猛将一の智計と同じ。蜂須賀。木村の首と響ひ帰参の慰贈ふあさんと懐ふ。因へ二個ぶ武勇と会ふ。只顧恃むところなりと。聆へ二人心のうち。備とそ這奴無礼士なれ。活る邪賊と知へきれ。吾偽と同者ふ投ふ。羽柴家の神祭機密感しても猶除りなくと。那公と尊へ這賊と思へ

這奴使へ活置べ。羽柴家の害激へ。彼庶ふ報害をべくもつと。山路も容易歌ふ。ふ。蜂須賀木村ふ縛をべしと思ふの脇根と決へ平り。命い然ることなりとも。蜂須賀とそ木村ふて。智勇猛士勇士なり。躊忽ふ事い計られぞ。とりふ将臣醫笑ふ。二士ぶ荷擔へふふの者。偽裸をること疑ひふ。既ふ一計と設けり。木村。蜂須賀父子二人と。我陣中へ請へ容。酒宴ふ較為殺害せべ。渠偽兎神の勇ありとも。撃損ぜることよりもあるべし。汝偽両人方分して蜂須賀。木村が陣所ふ到て。希望歎き誘へ来られば。密事とと。つく這二個ふ。諸せへ是将臣ぶ。不義を天ふも憎ませ玉ふ。悪事と自己ぶ口自得へもることを不思議なれ天偽なく市助。角右衛

頃賞ふ〳〵甚産と退出。今井ハ蜂須賀が陣ふ引り。野村い
ま村ゞ方〳〵赴く。然るふ蜂須賀彦右衛門ハ。山路将監と同所
ある。大杉山の上の柵を。堅固ふ守り在さりけるゞ。這須大ふ
霖雨〳〵。積雪ゆと〳〵堪がたくそれど。昨夜より終小ふ晴る。
今日も午前ハ細雨ふるが。日中ふ〳〵晴〳〵れば。除漂
せんがゝめ。一子家政一族ふ。酒肴交〳〵在さるく。山路が使節
今井南右衛門利直せと報るを聆。いろゝある用ふやこれ〳〵と
今井と所地酒席ふ招き。懇意いろゝと導るゝと。南右衛門
四方と看遠〳〵。之人も蜂須賀と晴さんゝめ。酒宴と催したふ
たぐる。昨夜長濱境より。懇切ふ申せ〳〵ふより。莫を賜ふ
一献勧んと。東城させまゝ〳〵せ〳〵り。這集會ふ紛〳〵やと最

驕相ふ稟出〳〵り。蜂須賀さそ〳〵怪く懐へど。愈恣べき事も
あるれば。招ふ関を乗〳〵。亟速参會つゝ牛ゝうんと。謂と今井い
冷笑ひ。這参會ふ紛きゝ。山路将監綱置と復て窺ト
の生頭を賜ふせん。小心ゆきれと謂せも果ぜ。斯い不穏あり
山路が使者。その初より口上の。甚意と得ざゝふ思ひ〳〵ども。
使者号ひふ咎めざり〳〵紙。亟稱〳〵る今の口状。這蜂須賀と
嘲弄もるゝ。今一云と吐〳〵看ゝと力推拒左右り。父子一族
ふ逼進を。南右衛門ゝ些も動ぜど。市父子達の生頭を。山路が
捕んとゆを絢縛ハ。昨数勝家の陣中より。密使を遣〳〵
将監紙。欲ふ遅ゝせ自方ふせんとゝ。ふつゝふ国〳〵忽地謀報。
各達を招倚せ。殺害ふ〳〵それ功〳〵勝家が陣へ走らん

今井角右衛門
密意を見
ちく蜂須賀
板助く

巧其実否をも糺さずして。忙く承諾やすく。迂闊不似合ぬ
疎忽あり。斯事も乃丈へ。全く山路が居家より伺ひたと謂せ
もつくも又十郎。影怯未練の角右衛つ。おの也山路が居た
るとて。確と知ぬ輩かうしんや。然るよ言と偽りて吾係
と歎き。不禮の咎況賜んぐるる。山路が居家不伺ぎ者ぐ。
主君の密事を他人ふ漏せ。不忠不義の大逆賊。家の先
懲也。糺よ。すぐ汝より撃捕んと刺く蒐るを今幷も練士。
脱つ奮りつ双頭と遁。霎時い寧ひたりるぐ。不得の粉須
賀父ふぐ武勇ふ斬紀られく。あーらひかも。一声ぐ叫ん
でひつ〳〵。蓋まんとまもど今ハ是邪ふ吾ちちハ羽柴殿
の所用ふく。更科角右衛つといハ者ふるぐ。山路が不形怪し

くりて。秀吉公の神慮ふよう。間者ふ投たる者ふりう。疑
しくハ是者〳〵もて。義持ふる陰符と反出者もハ父子い
刀と退も蚤〳〵陰符と取揚く。視ば遠たぬ秀吉の合印
あり。これらと驚き跳退く。刀と収め威儀振ひ。自若の捜慢
こも紛〳〵も。これもて者恐りふさぐるあるふ。不禮の不仕行されし。
是も忠義と情ふあるふり。かあ〳〵ぐ悪〳〵思さて。席を
譲りく解科投ば。角右衛つも坐と鬱〳〵。父子ふ嚮〳〵く蔭び
いふやう。所不審の限もつも。如極原乃丈ぐ出世い。伝別更科
ありるぐ。淹〳〵寡〳〵ふせ〳〵ふ。秀吉公の技能と彼り。他
の者恐らぬと僥倖ふ。間者ふ投させ如ふも。紛らで邪賊の
将盗心国君の明察ふ寸ふ遠たぐ。欲ふ遂ふく再度柴田

ふ反仙ちゝこと。元時も岡断ちぐきふ所ゝを。快く木村の方へも通し。推捉稠く鞨捕ゐへと。勢ふ蜂須賀淡ふそふ
ぎと。列首ある稲田。青山河口。長江。松原。梶田日ゝ野ゐんと
ふ指揮を布し。山路を殿ゝき准備とーゝ。備ふ野村市助
いこれも同ゝ大杉山ある。たの枝寨を堅めゝる。木村小隼人
ゲ絆ふ列ゝ。今井ふ等ゝ素性と陣し。山路ゲ謀叛と告
けるゐを小隼人大ふち驚き。山路と暫ぐ准備しふ布り。
然らふ山路ゐ陣へ。今井野村と遣ゝて渡。先その意構ゝふ。
次ゐ将監ゲ捕ふゝる。山路多八郎と呼ゲ。海ハ見より長濱
ふ列ゝ。姫内ふある老母書ゝ紙使ゝ。紙筆ゝ辞去ゝ。永路と
疑ゝ海津ゝ。敦賀城ふある野口紙登ゝ程遠ハ里ふ近ゝる

ゝ快ゝ行ゝ料理ゝ長濱の方へ使ゝ。今井野村ゲ
消息を供ども待ども渠係両人。背ゝ陣ゝ窩
表ふ變ありけゝ。と待ゝ在ゝるのところゝ。騎乗一人走ゝ来り。
喘ぐゝ告ゝいふ。庫事の祭りいふや。勝の軍勢西方
ゝ。這柵を當ゝ来ゝる態ゝ。と聴より将監速ゝも悟り。備
ゲ今井野村ゲ反忠布し。密係家ゝ引ゝ。先や陣屋ふ
火と燒ゝ。逃退ゝ。と清士ふ指揮布し。清布へ一度ふ火と燒さ
せ其騒動ふゝ移を大杉山と逃ゝ。川並文室の山間を
攀ゝ佐久間ゲ陣へ紛捉ん。と。洛ゝ。輝須賀父子一千
ゝの自勢と率張。直地ふ山を逃ゝ。山路ゲ柵ゝ近ゝ
撤會ゝ左の峯ゝ来村小隼人。これも同ゝ一千ゝ。双方

山路が親属
逃去と
欲〳〵
竹生島畔ふ
天女の罰を
業る

一度に推進る時は、諸将監は枝寨に火い燒川並山へ逃行を。聲須賀秀高指揮に、しく。又十郎に火と消させ甚象ハ木村と兵を勢せく。山路が跡と追蒐へ。文宝近く到り々る紙。山路後陣に指揮をして。一百ばかりの鉄炮と叢下に警出させ其陣に逃出へりれば聲須賀、木村も今ハ上るく諸兵紙繰めく退退ー火と結させて這事と。秀吉。秀長お嘗へ汝伸に迫られれば副將秀長木村小隼人に命ぜらるる。急ぎ山路が親属と。因捕べきー指揮ーられば承叫る。一木村成置。老業高松又八に口属。橋兵又十陸人と平張紙が如くに長濱當く池徒る。備又山路多八郎ハ大杉山より長濱迄。二里余除の行程と。一時許に馳着てまぐ未

に陣ぶ。山路が妻子老母をと。濱迄まぐ枝出ー。主従妻子サ七人。これより舟に乗に百反帆を張せ。海津と當く撞出へり逃る木村が老業ある。高松又八ハ橋兵を率ひ。磯風の如く池徒る。長濱の城に投り。山路が家に乗く着まぐ脱る最先藤行へるより。逆者の輩の強へと聆。備ハ湖上と逃へるあん と誉せに近ー。舟を輩と纜問へるに。果ー午過山路が親属。濱津迄とて舟備へれー。と言に又八いぐ云まぐ跡追蒐んと艘船整らせ。八挺櫓に乗く舞らせへり。これ十三日の巻る に逆き須ありく。敵へぐに山路が眷属ハ。船を速めて高行波儲の。正直に船を乗徹らんと。行生濱と右方に着へ。十反ばかりも過へー着る陸に鮮賊天の社中をおゆー。一陣の先

已ゞ不義の
讐と報ハんと
山路将監
盛政ヨ羽柴
方砦の虚
実を洩泄
も

弓張月の
水中へ射
こむといふ
強きものなれば
あり。この二
三尺ばかりの
べくもいふ
でら水棄
いつくしうる
海んや

放〳〵ーーっ。忽ち水底を突出て。蒐巴の港らと風車の條くその水勢ふ隨ふ〳〵。山路が船ハ輪〳〵轉〳〵。舳艫と視分ることも惡さ。ハ蜂女児翠ハいふも更ふ。りサ除人食倚ふ。船あらんハ艦ふ捉着。法っ呼びっ依膊ふ中ふ流れの多八郎。弓推把て勢撮養各姉〳〵こそ。ふれ。これ賊といふこの弟ん。先ほど弓精の蔓と見ぜんと強橋く〳〵こ江度。放つといつても船ハ舞らんば。東西ふ引色養んとも活ふこそふ高松ふハ。艪声活〳〵船を祭らも。仆生鴻逆〳〵ふりうるが睹と那方を着て行さ不思縄や山路が船と着〳〵〳〳家ふハ走らんば轅の條く滾ふ撮らもく輪轉在るそれ逆蒐ふと舞蒐り。其際迫〳〳家ふ。高松又ハ艦頭ふ寅紀大音揚。それく逃てふ逆ふ山路が

一族ふ〳〳もや。その船逆せ蹴もべ〳〳と呼ぶ〳〳逆蒐ふ。多八郎を縋ふて老母妻子傾逆慈と着〳〳。今い活ふる心地もふ〳〳極〳〳船の舞らぎふふ。又ふや欲の逆会蒐り〳〳。通ふぐき途断絶ふ。老母妻子ハ大ふ慌〳〳。由ふき將筐が泳通ふ。活る辛苦沈見る絆ふ的。血伍ふる天罰ふりけるぞと恨〳〳嘆きふ天地を拝〳〳。祈ふと。ふどが感夜ふるき。ちや逆ふる五八が船へ。其陳恐尺ふ刹る晌。多八郎い通ふ。ふれふ。ふ。寛船を決〳〳〳〳弓ふ矢撮〳〳。きふ〳〳放てば高松目速〳〳矢活と避て身と打る。山路ハふ速〳〳亜の矢と搭ひ。裁〳〳放てば五八ハ。船庭不身と沈め。光来る矢決と通ふ〳〳ふも身と跳らせ〳〳山活が船ふ誇稜ふ。掌より速〳〳横薙ふ。斬るふと着えー

太刀尖へ。電より猶活くして。多八身と胴砕ふ。喰とも叫せず斬殺せば。腰より上へ湖水ふ没し。脚斛の。こへ船ふ残りく。波の緋ふ紅の血潮幸ふあさましきと。僥倉ふ着行る將監が。老母妻子ハ懼怖を。活くる心地なきなり。漢注千第之量なり。又八が擒兵因捨ふ。多捕ふ將監が一族七人擒擒ハ食居家の妻子ゆゑ。殺さも益と其侭ふ。和と一夜放ちけるが。波も然すりいろ暁ふ皓くと湖上を照しく。夜景もいとも清際なり。高松又八ハ七人の。囚輩幸起和と逸しく。長浜の岸ふ着。荻末の當刻ふ未ふ為る。田神山ふ帰りくるが。這時既ふ大樹よも。秀吉卿の命わりく山路が一族と捨ゆゑ。柳瀬ふ着く幸出し。

禦ふ指揮ゆゑ。それく准備ゆゑせるも。十又日ふ至りくれば。東北山より巳又町出く。第四が陣より着通ゆ。柔ふ喬く樹老母と敵妻子一族。七人夜しく掴揚礫ふ柔られゆゑこれと見関ける他軍も。山路將監が强欲之道を。怪まぬものハなりくゆゑ。

盛政与二國謀殺中入軍 勝家大制

其性屈なる物ハ風ふ勝く雨ふ敗る。猶なる紙者是なり。其性寡なる物ハ。火ふ强く水ふ强し。所謂雲根是なり。然るふ山路將監巳國ハ。二月十二日謀計忽地露顕して。遂ふ佐久間が寨ふ逃投り。盛政ふ斯と告れば。去蕃こづく出迎く。歓悦もるもと斜なるを。久くの対面と遁ふ賀し。まづ將監が蜂須賀條と。擒ドたる計策を話。感念言んかゆゑと。聆く盛政

山路伝慰め。すづく足下が忠あり。自方へ勠力せ〜ま〜こそ。此
上も亦大慶あり。地理よき所と察辨ひ。陣營と構へべ〜とそ。
心を尽し〜く餐意あり。慇懃ふ奔走〜々れば。將監ますく
心と切ふ〜。莫大の功と頭〜く。三分の褒賜ふ関らんと。利ふのま
眺り在り〜ところふ十五日東野河原の堆き丘ふ。梟ふを立
山路が一族七人と。殪く衆々れば。了淵ふ强氣の將監もこれを
看く心魂乱れ。闘絶もるを。哭〜々るが稍あく気と励ま。
嵩城切く憤怒ふ激〜。東野山とうち視行今井。野村と走く
罵り。這怨ふ日と移こば。羽柴秀吉と撃抵く。先田妻子
供饗と。悪念発起ふ〜るる。自己と忘る邪賊あり。佐久間
玄蕃い將監が。羽柴と恨むる甚心根。ふつとも深〜と殆く悦び。

是究竟の方便あり。渠が憤恨ふ助入く。魁隊ふ進ふ怒然
と上方勢と破ら〜むべ〜と心〜使士と走らせ。山路將監を
招倚ふ愁傷の情と慰め。愛別離苦の掃除せ〜よ〜て。酒
〜て勠め衛いふ〜。是下ハ羽柴の陣ふ存〜く方塞精〜く
存じらまんが。ま〜ば合戦と秘るふい。何方の陣ゝ攻く宮〜ん。
賢案の量と承唯らん。と問答られ〜る將監心國。姑く沈吟〜
蓄く猶ゆ。倩〜ふ羽柴が寨く。賺ケ嶽いのく追ぐば。東野。
大和田神山食を。の要塞堅固ふ〜く。切く容易破りがた〜秀
吉ふ〜。唯備〜れば。攻陥もべきやうもあるれど。粤ふ一箇の
枝寨ふ〜く攻拔便利最も宜〜。其ハ黒田と坂口ふ跨る。大岩
山の一樓なり。要塞も堅固ふく。卒尓ふ攻〜ることふれば。

光月の志ふ成紙しくれど霖雨ふ怪うて堞あんと。壁土もすぐ
ゑゑくハ乾く。結構もすて疎忽ゆて。除の陣営と甚中間遠
く隔たりしかば敵の兵も遠畜なるゆゑ這便宜より攻ふ。
居ふ當りたる討議も行んと。教示ふ盛改蔵蒲ふ。遂来
後しく日を送るも。敵地の虚実知ぎるゆゑ。新延ふ進ぶと
ゑ。光や一方の謀畧と施し。大岩山を隔たるべ。除の寨柵ハ攻
ぎく。城外の像く陣駐ぎべし。這等の討議食都て。我方
寸のうちふありと鈍撓ぐ着えける紙。猶も玄蕃と懇まきんと。
羽筮左右ふ首とお煙舌く然ゆて揺り動ふ。大岩山の寨
柵の守將ハ。又織内ふ名と震たる。中川瀬兵衛清秀なり。
甚と侮らべ成損ぎべきふ。所意畧なく遣へ玉へといへば盛改

山路ふ吟ぎ。一夜大將ふ見参せんと。將筮一称うも伴て。猶家
ふ陣ある。内中尾山ふ糸使ふ。山路ゞ謀話せ。詞奏と。洋
ふ結ぶ后。中入の軍せべ。勝利必定あるべしと。勧め奉るふ我
勝家も。為將ゞ絡を熟く聆。時稜る牛ぢ多と足き。沈吟と
凝し在ぶり。玄蕃ハ性系の猛士なれば。席と進で栄田ふ
嚮ひ。乃呂設けし軍議と謂へ。深更月の光を借て。池ふ
門蓋等の羣と傳ひ。賤嶽の麓ふ出。除者の湖上を東ふ通
じて。大岩山の枝寨ふ凝守ぶる。中川瀬兵衛が陣ふ推進一刻
攻ふ寄るゆゑ。ふ勝利と得んこと必然あり。快く思紀玉へ
と。號断ある顔色し。勝家実ゆと懐へども。思意滅うゑぬ
大將ふ対ハ玄蕃と制しく。甚ハ除き謀畧ゆ。他國へ出ての

中入い。甚くつく難きものあり。備後擬ぎることのあべ大将駿乗ふ至るまで。最大なる災禍ありとて。軍議も更ふ決せざれば。云蕃大ふ気と焦燥。斯徒産ふいつまでも。対怒く日を送るうち。彼年激落ち。鬱江も海威弱りあべ。其頃ふ脇と嗤ふも詮ち。解今敬国弟一といふも。後ふ別ち結陣しれば。這等ふ歴守の兵と至。悲く中川と攻起ぐ。すい賦嶽の歴守ふい。佐久間三左衛門勝政と出。大移山の歴守ふい。今森瓦亦八。淺見但馬守と出させ。當方ふ向ふ乃居い。淀井若狭守。泉郷瓦右衛門。富屋七左衛門ら係ふ。二個の舎弟を率ひ。漸く中川と攻起ぐ。徳山又吾清。瓦表次郎。不破表三係ふ並進ぐ岩崎山ある。高山右近と攻起ぐ。悲して

者ふい後陣とあり。雑ふ勢と纏ふひ。接云勝久と先陣として一駿ふ猛ふ慈と見せるい。乃ち移骨陣身ふ。中門グ陣を抜んこと掌と翻ちう容易。一陣頼ふ。ものあるいふ敬ち兵強動く。虎の係く怖。就の係く懼ち。武ふ陣り武ち退き。忽地七頭ふ倒せん。甚威ふ驚く追撃あるべ。迫ふい。おろう瓦戦内まで攻着く秀吉と。中ふ捷ち撃のあるべ。いろふ智勇の様冠者ありとも。進退ふ途と失ひ。一戦のうちふ敗ぶんこと跟と回らちふ迫ふべうぢ。今這時と失ひあふ何日ふ秀吉が前と見るべき。秀吉ちぞふ撃ぶべ。甚除い度しく降ると復ぐ。と上方勢と只一呑ふ。掌ふ捉如く動めける中て大将勝家も叔のうちい。先き事と諾ざりしグ。漸く

佐久間が勧めに随ひ。汝が軍慮も一理あれば一番鬨て敵兵の
強臆の量ば探試もこれ計略の一助たり。然ども羽柴秀吉
は尋常の将士にあらじぞ。彼は侮り擒ぐべきぞ。今宵敵陣へ潜進
り。一挙と攻陥し。虚実と窺果せなば急速注伸いたすべし。
縦令仕果せられずとも深く務に案べからず。只速に退去べし
他の援塞をば陥さんなどと。血気に誇り自然を損ずるに至られ
秀吉濃州に在りといへども。是遠方といふにもあらねば随分彼が
意を撓り。進むとも後専らせば退く事を要とす也。しかし
猿猴ごとく最悠切に諜しめされたり。これ然もつとも試る勝は。勝家
を初く尋常の大将にあらじぞ。嗚呼天なるかな命なるかな。這
一戦に事敗るれば。一天下ながらにて豊太閤に。握せしむるの期あれば

なり。然れども佐久間玄蕃は。軽驍なることを好みて山路を
其の陣所に還り。急ぎ諸将へ徇示して共に準備と整へ
なし。別て自勢に厳示して曰。今宵合戦に出る兵士は。軽き
鎗は無用なるべし。其故は中川瀬兵衛が援塞の結構。大急
に造設したれば。塞の壁土備はらず乾かねばこそ。稍及ばぬ然
あれば必定塞試に。濡べき事のありぬべし。これに関ていづれも
旅く。長槍の鋭を所持せしむれど堅く謀略するに。果し
て玄蕃が思慮に違ずんば。塁試の鎗の功を遂て。中川が寨柵
を破り。大利を得ることをもて要する所は。玄蕃も必得の将なるか
ぎりは。然れども盛政は。敵を攻べき伍組を定む。まづ賤嶽の
麾守として柴田三左衛門。水野新七。安孫子又右衛門。大将山なる

蜂須賀父子の麗守らて。金森五郎八。同じく下の柵ある
木村小兵衛人ゲ麗守あり。原長次郎。大杉山ある蒲備。猛田の柵内 小
川佐渡守ゲ麗守あり。安井左近。東野山の麗守あり。滝見但
馬守と出張あらしめ岩崎山の麗守あり。山路右馬と云ふ者
ありて不破長三と逐副ら。備前大都督佐久間玄蕃盛政八久
左衛門安次孫六実政這両人の舎弟ふ。津郷富屋。徳山備。一
騎當千の勇士猛卒。又千三百と率連へ。（滝辺水藩の書ふ一万四千とあるは誤なり）當天八
四月十九日。漸く寅ふ近き夜の。月と炬燭ふ己路と視分。鳴と
鐘め鐘旗と伏せ。行一山を絶ひり。池原山の搦手を登りて峯
を三所ひと（丹波八戸川益等）南ふ越。賤嶽の麓ふ出。其より餘呂の湖水
陸と。十四又町程東ふ絶。大岩山ふ向ちんと せり。這路未途ふ到

らる駒。佐久間ゲ老當二宮長助といふ功者ありしゲ。玄蕃盛政
より切齒ひ。中川瀬兵衛清秀ふ。聽ある勇智の極將ありり
縱令バ敵と對述とも。防戦のこと いとまもなし。自方の軍勢呈連
乱れ。敗走ありと看るあらバ必定こづらう駆くべ。退散さんと
擬くべ。其時自方偽く。敗走あらバ後路退ちん。其虚と
考へ。間道より中川ゲ後陣の方へ出。枝寨へ火と焼攻記るこの
あらバ。弓溝流の清秀も。茅渡と防ぐふ度と失ひ。乱近ると
擬逼あらバ。大將と撃技寨と拔ふ。ほと翻ちり易うべ。と説
ふぞ玄蕃頭ふ。汝ゲ教示よく我意ふ稱しり。此原ふて
直ふ隊新と あさんと。舎弟久左衛門安次。同孫六実政ふ。神戸
長左衛門と副。其勢七百除人と持しせ。中川瀬兵衛ゲ後陣を焼

佐久間の魁兵
餘吾の湖畔よ
洗馬奴を斬く
戦発を祝も

[illegible]。指揮と傳つゝ閑道より。流くして走るせゝ。[illegible]
右近が。投寨より。後逼の長の蒐る時は。合戦うゝ[illegible]
矣えんも量りがゝと。德山又[illegible]勝ふ七百八十餘人と[illegible]後陣
の加勢とあり。甚身は[illegible]郷五[illegible]と先陣こうして。[illegible]
富屋七右衛門と左右の翼とし。水野總兵衛と後陣ゝ列
大將香蓋密改ハ。こゝゝ中軍ゝ隊伍と達三千八百有餘
[illegible]三百の内一千百八十余騎をへて馬ハ瀧を楚と結だせ。長士ハ各枝と時ハ。大[illegible]
より賜嶽の麓と横行。除吾の湖畔と過らんとも。胸ゝ一天[illegible]
彌ゝ。紅多流東雲ゝ[illegible]。黑白定着ゝ明あり。粤ゝ軍
事を統ける長士。勝嶽の枝寨ある。葉山修理亮ゝ居家。池田
伯右衛門。太田平八郎。馬[illegible]軍ゝ[illegible]屬ゝ。馬の足と冷さむ。[illegible]

個結着ゝ。ゝ[illegible]曉ゝ[illegible]ゝ除吾の湖水の流淋ゝ。馬と
等投方の如く。勝節ゝ[illegible]ゝ流ぐゝで馬足と[illegible]在ゝ
ゝ。佐久間ゝ先隊[illegible]郷久國。それと着るゝ楚ゝ指揮
ゝ。良獲物ゝ[illegible]着當ゝ[illegible]。快擊投[illegible]ゝ[illegible]ゝ。ゝ個
の穢と投稠ゝ。ゝゝ一個ゝ心利ゝ[illegible]着ゝ[illegible]ゝ逸[illegible]疾
ゝ逃失ゝ[illegible]ゝ二個と左右ゝ[illegible]投足軍神の[illegible]ゝ
曉紀ゝ攻[illegible]。

盛政定[illegible]紂推進大岩山屬中川瑞戰

這[illegible]郎[illegible]と[illegible]ゝ。[illegible]ゝ[illegible]ゝ勝。靜ゝ[illegible]ゝ敗る[illegible]ゝ強
[illegible]ゝ[illegible]。唯其[illegible]。[illegible]ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]山ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ逃[illegible]。[illegible]田ゝ大軍推進

ありと称へ〻〻るゝ。池田は更なり兼山羽柴田大ゝ驚き両将直
ちに寨楼に登り敵の進来る様と視るゝに甚猛勢破竹の像く
麗〻谷〻に充満し。清正の越寨へ出と部。麾守の分撥最最
〻。推行勢は足平〻。大岩山へ向ふ様あり。備へ殺賊山路迫
隘。自分の隊伍の塵奚と出く。大岩山岩崎山の濃構と知て
攻るあらんに。斯て強気の中川ありとも。全く特果なるべ。
吾も助けまゝいもあらんと。定めく麾守の勢あるべし斯ゝ如く
愜ゝ〻と劇〻寨楼と跳下り組馬とめて中川が方へ言
遣けるは。今寨楼より視渡せば。栗田が大軍雲霞の像く。其
所寨柵に向ふ相あり斯寨〻あれば疎忽に似たれど所陣営の
結構もいまと全うさぎれば。防戦のあるべきなく〻。万一

所陣に過失あらんに。清寨の自分慌気と失ひ。清軍恐怖の義と
生ぜん斯ゝ様に織田家に不忠ゝ〻べし速く這方へ所属合
なるべ。迫せばあるべかと懸せ。偽に防戦つるべし登く思
記あゝと使節とゝに遣し。これ。這時中川清秀は登くも
敵の進ると着て忽地清隊と様させ瀬を渉が当日
の戦器へ。紺糸威の大鎧に。十文字の槍と着し。なむ〻〻の
又鬼あり。大鋼の鎗と迫士に齎せ槍の柔作たる大鎧が下
に。栗毛の馬牽せ〻乗机に寄腰。さらといそべ騎出さんと整く
態と勒し〻〻。来山が使者弛事這語を告ゝるれば満
面に喜色と含み使者に対し〻〻言く斯は佳態美の使節
に関り。歓悦とれに過ぎべし。命の如く這寨柵要崖も

調略を結構も淺遠あり。されば誠に兵勢の大敵を近對。防戰せんと稱すれども思つても這一山の乃帰と高山右近二人のこと中川一個云ふんと。勇士の本意と失はれば。這理を陪奉ー

縱くべー乘ることいつても高山も其陪扶寨へ退云あるべ。仍ふ右命ふ隨まん。這時よりく兩將へ頭答寄容られく。陪使者大義ふいでと義勇織より宰くられば。使者もるとく感佩ふ辭穢ふーてを帰りる。這時相根田藤山も於ぐ出ぐ清方のお樣ふー。待陪ふ使節紀帰り。瀬兵衛が返言ふ細ふ告れば二將も清秀が義氣と貴ーー直快言山右近が所へ。駟馬とめて退去ーー。愈ふ告るるもぞ。右近藤山が使節ふ向ひ。命せの旋承知ーーれど。既ふ大將陣列と級。將を搖んぐをれば

守禦と命屬られるー。それよ自分の要塞と矣。他所ふ退くべき緩故やあると。嘗く同意の氣色あるれば。使者もこれ辭ふ御あく暮び中川が陣所ふ赴き。呈狀ーー這方へ所退云あれと綱を差ーく練めるれども。瀬兵衛清秀。原來大膳の勇將あれば。これも今い動ぎる色ふく。言山彼所ふあんん限濃ハ吾も大岩と退ぐき通ふー。彼ふ退ーーー。烈氣ーく在るる名使者も今更力ふく。賊羅へ辭帰りぬ。右のくらふ故ハ去や。故寨隱近く推進ーも。ニふ八百一國ふ喊と出と蒙られば岩ふ鳴き谷ふ響く。震動ーてを驚えーり。中川瀬兵衛清秀ハ勇智ふ留ーる大將あれば。更ふ驚く氣色ふく。二千除騎と賢く指揮ふー。弓法と泄ー矢筈辭。弓流ふハ流業丈夫ふ

投入強襲せんと。猛却く結蒐る。佐久間が先陣拜鄕ふ
左橋つ久盈一千除騎と懸きて。実と進延茅辭の鳥銃数
百撃蒐る。堤下へ着進んと。森めき近るを投寨の内ゆ、
決晴着徹し瀬色清清秀。時ゐい宣状甚へ祭せと指揮
する意幣一森ふ。侍級る諸軍勢。一度ふ実と記露を
弓鳥銃の陣し位。これ於らしと射發撃紀こそと專途と
精神懸し。際際あるせぞ防禦しくれば。驍紀る北國勢
將蔡側ふ警備され。おりしば銃と敗退く。魁隊の前將拝
鄕久盈。憤怒して大言る華。蓬き自方の不行る這弾の
鉄を攻んる。最着囲しき相とるを唯法攻ふ寨破と。
進声励し指揮する。ぞ。揺動る壮士輩。調を傾け袖を

翳し。花赤る矢炮を拝去し。陣一も乗せば驚地ふ攻登り。あい
や懸下ふ忍人と。るるあそ。淺井。富屋ぶ吾士輩。這不行ふ懸
きされ。同し。續く推逼し。喉し。紀し蒐蒐ば。中川瀬
兵衛ふ。こそ拝と。柵門組と八字ふ開せ。強気揺安く一千
除法。吐と噴く実発し。北國勢の駆りる。その正中へ別て投
大象の海波と池起るもど。横横綬ふ射紀ば。進吾ハ忽地
憂慢ふ。蒐蒐ると辯鄕久盈。憤怒して駆章と懸き
し。勢噴哨まぞ指揮されども。前蒐りし吾士の演氣右横
左横ふ攪起。紛こし乱走せ。又落つ獨沼出り。勢投多る
中川勢ふ様り合。所地ふ丈去騎側し血烟厲し戦へども
勝ふ系る中川勢。攻忍退逼るぞ。一溜もなり

佐久間
盛政猛
憤ふ堪ず

自ら敵に
當らん

將也。上除吾等迄退されよ。這猛將ふ今ハたゞ中軍の隊伍
乱紀既ふ崩れんとふしける。大將佐久間玄蕃允盛政自ら方の
敗ふ墨と爛し。先や勇量と顯著られんと。逃まる自方と左右
退うせ。自身正鞭ふ馬と騎せ。八尺許の藏の槻の枝を攀ぢ
を。最猛くと揮回し。捷驕ふる中川勢の正中へ。會釈もあらせず
馬蹄投當るふ伝て撃紀擲起。馬ふ都合ふ蹴飛ふ。勇と長
して捲返せば。怒氣十方の中川勢も。佐久間ゞ猛勢ふ當りがて
我を忘れて隊伍と乱し。退返さんとふしると。瀬ふ清虎等
淵之助清浅同小七右衛門秀沖同七ふ清。同新十郎。大流鳥右
衛門俊。後へハ退じと執憤虎怒ふ。退返しつ及方ゞ石と横ふ
我と重んじ。撃つ殴ふつ搦ふつ。満つ雨刀風天地も暗ふ。血腥

烈しく戦ふ。中ふ拝郷五左衛門ハ。軍熟ある勇士なれば。中
川勢と爭ふ。突ふ馳脱ふ枝塞ふ蔓り。頻く持せ長槍の
穂先ふ又百騎ふ揮輝ふ。夫長ふ揮ふ先ふ進ませ
千塵と流視深側ふ奈著。喚呼ふ攻紀ふ留守なり。ある
古田兵ふ右衛門辻重ふ。市浦浪ふ助保駆華ふ指揮して
防戦ふ。其活きと電光石火柵の内ふ放発ある弓鳥
銃ハ雨霰。面と向べき。やうもふ。撃ふ拝郷ふ決華と
驍め懸まして。枝塞と攻る機會ふあれ。山路將監正國ハ若侍
山の乗通ふ者として。高山ゞ枝塞へ向ひ。ふ戦も発ふさるあ
將監ハ自勢率具して大岩山へ取く返。這所ふ集りて拝郷
ふ力と勢せ。蔓比ふ深側へ先と推逼。准備ふ。ある長槍の

壁尼ヒいまゞ
乾ざると
量寮て山路
拜郷堺越の
鎗を用ゆる

後ゆく。すぐ乾うざる壁土と。塀瓦不意と
荒られ。鎧投捨る陳も多く。矢と挿む眼もあるせぞ。城中これ
不敗られく。百人だより突倒され。慌忙き強ぐといってども古田
市浦辺あんと。必死と為つく防戦一々れば。要時ぶ程に持
堪ぎりぞ至るく玉薬ぶ持せ長揉の後。利あるく戦功
傳大なり。中川瀬兵衛清秀い。佐久間と大水と闘ひ在るぶ
投寨危しと聆えけるゆゑ。退退きんと逸速く。向勢と繰めて
退うんとせ。佐久間いこれと左右ぶ。後夫連列く陳陣もあ
ぜぞ。敵代云ふ不攻着るとぞ。小七右衛門。淵之助投く逸して迫つ
奴輩。新蔵一突倒一。瞬もせぞ食止る。這陳ぶ瀬兵衛清
秀い。同苗七兵衛。新十郎。古田紀之補佐と隨く。揮郷。山路

羆（熊ノ如ク毛ハ黄白ノ紋ヨリ頭長ク脚高クシテ赤猛ハカ多シ）

後ゆく。龍猛虎激の威と振ひ。斬く薙るぶ敵しがく。左右風
と別れぞ。

中川兄弟戦死于大岩山屬氣歌示図

陳を己ぶ独の説ぶ言ることなり。晋人大と牽て掘を。五大一羆
を逐羆い驚といっぶも力大ぶ及ばざる所あり。大い羆より弱れ
ども。健ぶして巧あり。左と顧く右を曙。兼と逐て後と牽ぶ羆
搏ことあるべ。行こと数十里ぶ及ぶして。羆敗く伏を。大更ぶ
進んぐこれ戦殺を。一羆五大ぶ闘るも中川。佐久間ぶ合戦ぶ
頭め似ることあり。然るぶ中川瀬兵衛清秀い烈勢極で
猛郷。山路と攻着るゆゑ。左右く別れて通しれば。投寨ぶ投
らんとぶしるを。佐久間後より暴兵と投換吐地の傷ぶ変薙る。

於れと看るより拜郷山路。鶴翼くありく中門と。中ふ投掛之方こう。火烟ゆ出ると攻着る。甚猛勢ハさるがふ。黒雲頭上ふ記るが像く。隠風脚下ふ卷ふ似く。峯裂谷ゆ爾るくだりり。柿〳〵こそ看えふれ。粤ふ間道と廻りる。神戸兵右衛門。佐久間久左衛門。同孫六強車拝。擇て七百餘人。投寨の後の山陳ふ。潛却く在りしが。峯ふ細作ふ〳〵る紋車。走下くんや既ふ。諜誠の強と用ひると。於より神戸。佐久間兄弟。時こそ来れと駆車ふ指揮ふ。ゆふ准備の投拠拒ふ。火と移そると看えるが。投寨城服下ふ着却て。陣厩の屋頭ふ抛蒐〳〵ごと専途と搭くるがふ。峯吹嵐ふさそそれく。燐と燃紀火の頭と共ふ。喊と発〳〵く攻蒐る。投寨の兵士防ぐふ能

なく一時ふ乱れく投寨とうちる柵より外へ跑出佐久間ガ勢の混列ニなる正中へ憤死走ふ斬投より中門清秀尚も屈せそ。二方の敵ふ撃り合。千変万化ふ術と確き。近づく奴輩棚紀抱伏十字ふ跑てハ巳字ふ西り。斜行ふ馳ゼバ飢る鷲ガ。児猿を搏んと走るが像く。執く返せバ怒る鰐ガ。絶韓と呑ちんを勢る。これガ翼ふる小七郎。淵之助。大滝鳴右衛門熊田喜三兵衛と走ふ荷積捨矢の駆車ふて敷ケ所の疲と被るといへども。堅ふ屈せそ戦在しふ投寨の後ふ火燃燈徐烟滝中ふ霞剣り。爆ゆる琴の響く。既ふ投寨も破とふや喊の琴耳と貫き。新説だりふ聆えられバ瀬兵衛清秀既と顧眄愕然くく大ふ驚き。呼吸感や盛紋ガ。謀畧ふ

佐久間拠
炬ど志く
大岩山の背方
焼しむる

陽りしし。先彼敵を逐撃さんと取ると返さと云番鹿改銭概
ねち揮り正魁ふ進めん。右の方より拜郷久留。左の方より山路
正國二將一駿ふ追来り。後池ある中川勢と。鹿ふ合わと乱戦
さ。中中り拜郷又左衛門ハ正魁ふ池出大音あげ。吁看国ー中川
清秀。君佐久間の猛威ふ怖ぢ。背甲と看さる鄙侍ぞり
這期ふ迫んぞ。日来の武勇も消失ー。臆さる律の蓬あさよ
逃せ逃せと罵詈捌く。飽まで恥ふ曷るふぞ。猛勇傑氣の瀬ぢへ
清清秀。這憎ぞと称ふ。ふふ摘藤のあるべきぞ勃然と
しく大ふ怒り。双の眼と蠢と眸瞰取ると返して置も脱ぎ。髪
逆衝く大喝ふー。何條雑き事やらる。憎ぞふ敵が虚ぞの。其
舌の根と拉裂くんん呑陳量とび試さくふ。其地動くふと

一躍百丈穿と棄ぞー酔氣ふ。山田と巻憤怒と發ー。ふ熟ー
淡の蟻前より。鑿柱ぞ凹と潅き。紙糸勢と縦横鑿鉞七八
遍ぞ追捲ーぶ了將ふ丈丈の長槍も。劉らふ強く當り名ぶ。
凝火と岩ふ落決と音ーて絶尖八す棚折ぶり。郎ぞいて相列
定宗ゲ振ぶる。三尺部寸の大仰刃。撃ふハ電光。砕相へ電大より
猶活く。鋭ふ搏ぞべ肩より腰ぞ。横ふ搏ーべ胴着二ロ清一度ふ
搏くく利ぞと草と羅如く。粤よ一世の勇と顯ー。死と極めるる血
戦ふ。驍起る拜郷も。懼怖く後歩ーぶれば縣波の威となる
紙糸勢。右ふ顔ぞ左ふ羅ぞ。敵をも名とるうち忘ぞ名後ぞ
と乱走ぞる代。弓翼ふ中川清之助。馬羽ふ小七右衛門秀治。祝
此の陰虎牙の太刀。掬バ山岳鳴動ー。撃バ渓澗沸涌ぞる

奥叫く駈記る。徳く中川新十郎。同じく七名場。市浦浪之助
大脳嶋右場つ。辻堂名淵傍。おの〳〵血潮ふ浮沈して。千角ふ
跳り万面ふ。跑記激立地蟯る。猛烈の身ハ赤紅。他軍兵ハ
三ツ上城渠。自身の血脈ハ下ふ流く。鐵なるゝぬこころもなく
鰐〳〵こして巖滴の。急雨と灌く所見ふ。勇名猛士が死と
決め。命を拠つ烈戰ふ。洋郷山路も跳り得ず。吐と羅ふ敗
走ス。中川勢も這際ふ。飢と退揚一息つき。自兵の傷死
と算ふハ。二度までの跑合せふ。二千七百除人撃ふて。兵ふ殘
るハ僅ふ三百。それも負く淺深の。傷を被ざる輩一個もなく。
そもく好ふて嚴糸せ〜縅め。青紫緑黒と看えゝ。負
一様ふ紅緋と色変ト。袖ふ腰膝ちぎれ薬りく多くハ覺も

掻拠棄。血ふ血ふ〜髮髮と。綿嚢清へ鎧掩。岩ゲ根楢杜ふ腰
うち彎。石傍と掴〜く喉を伺〜。霎時慈ひ在ることく
杖寨ふ在る古田荘ふ右糸つ抑ふる絵と杖と多〜。肩より
脚の跟まで。血ふ泥ふざることもなく浪絵ふ紋来り
〜ゲ。大將清秀と看るより。近く跑倚大地ふ平伏〜。熟
湯の傳き洞を流〜く吁面目なや欲ふ。杖寨と焼撃
せ〜ゝ〜陷罪。百死と〜つく階解とも。兎く俾紋ふ〜〜。
只顔容敢歸ふとゝふ。一旅息絶ふ。衰ふ弱ふ又勇ふ
〜り。這脳佐久間盛政も。烈〜き軍ふ駛乗と損じ。撤刻休
息ふ。在〜り〜ゲ。中川瀬名衆と撃漏〜ふ。彈〜〜き大事
ありゝる紀と。口方と儀と視滿ち。敬と歴守〜自軍の陣仮い。

整くして旗註揺うそ。投寨しも食都く法云却く在る
こそ。佐久間が戰場の最烈しく。分捕ふ陳際あり〳〵と。怖ぢて
中川と故ちぬあんと。云番いまも〳〵驍記。這際ふ大〳〵大岩
山を。攻陷せらそ自方と指揮ふ〳〵蒐ちといまふふ。服
部〳〵る中川塊と。微塵ふあきんと推進る。これと一時ふ投寨
の後路ある。槍大の小より七百除後。佐久間久右衛門。同添六
神戸云右衛つ。正巡ふこれも同〳〵中川が。小毛目的て近来。
這時瀬云郷清秀い。投寨の茅渡と破らと。二の丸ちづふ
張るといへども。抱防くふ見ざれば。大岩山の焼ある。坂口乃西の
猪口。と云く在〳〵。其と看るより佐久間が魁云同隔
又十歩ばかりふ馳着。瀬云郷と當く元口ふ糞土の如く罵り

呼ぶ。清秀今ハこれまでなり。自方の云兵一個〳〵て活づき相も
見えざる活。いつそ貪生へん先際く戦死せんと馬絡ふて
を小七右衛つ側之助。左右より纏ふ把延り。斯ハ組意ふり大
將ハ。死を潔くせといつそも。首を敵ふ撲きねこそ。本意あれ
今い兄ちば誰あつく看徳ら取輩もあきらのと。名もなき
歌の手ふ落り。偶繰りく死を逐ふて杉憾きことふいくいぞ
や俺们此と拒抗べくれば。投安産して生害あれと。強ふると清
秀莞示と笑ひ。舎弟が涙ふ強ふそふぞ。最も道理ふありと
いつそも。吾ふも死〳〵の百存あり中川瀬云郷清秀ともいふ
べき除首と。自ふふ刑く死ちんより。敵ふ撲せて英〳〵。功
名きそるも伝義ふ似り。其許ふ我程来。戦場ふ向ハ遺決ふ

中川主
従決死の
戰を潔く
ぢんと殺
時一點の
活を養ふ

敵を毆こと尊を知らざるもつまづく縛縄と。敵よ看せるこ
ありき。今日の戰も亦濫ふる羞んや。切々今生の餘念よ。今
一戰と愉快ふし。戰死せるこ本望ふれと。勇ましく滅さね一
言ハ大張當時の英雄ふり然ふるこ戰前勢ハ。中川瀬之清
を攀漏さずと稲麿竹葦の隙ふきゞ如く。然くと推拉國
もを。間隔十歩の迫きまふるまで中川を從身動きもせず
敵を引著たりくるゞ。大將清秀鞍擺整一後兒の自方と
顧く。先や最期の決戰して。黄ある泉の衢ふ冠歩一間
王城の路闇うん徒けやつと一揮列起る北軍の真
正中へ正一文字ふ嗚と嗚く跪ひり。瞬せぬ隙ふ良武者ハ
五騎左右へ散離く砕く塁一六七騎ふ傷と彼ちせ。遥ハ捲

ゞ。裂從刺来太刀ハ利潤。躍る馬ハ鬼をも嚙ぐき大後ふ。有情
を情のかゝもべく。を抜枝くる嘶鳴双鳴。敵ハものゝ岩石ふ。
當ゝべその中ゝ彩灰濛塵。其猛烈と塗ふゞ。慶利丈天をゞ
憤猪と猛く。須ふと奔走るゞ傷く。これゝ継く舎弟淵之助。
小七右衛門。同七兵衛。新十郎。九郎次郎。平右衛門。這ハ人ハ清秀ゞ。
倉同肥の同枝ふれべ。ふとう瀬兵衛小芳ゞ。敵と看るふと
蜘蛛の後く。異口同音ふ奥紀。崩蒐ゝ北國武者と。斬伏棚
伏ふるゞふ。絡ゞ乱ゞ相ハ。狂風林を震ふ隙く。烏鷺
巣栖を失ふゞ如く。駭雨狂を洗ふゞ及んゞ。蟻螻泥中ふ溺ふ
ふ似く逃るふ東西と辯つゞ。天地首ゝ乱敗ゝれバ其這
号と脱るゞと死張りるる中川勢。を從僅ハ又十騎。身ハ百

裂ふあるまじくも。一足後へ退びたりて。合ず難ところ集ひ敷つ。雲霞
波化して戦ひくれば。北条これを撃ちもの。蓄附ふ百有除人ありて
大将依久間玄蕃允。這慈と視て。鑁剛をなり。那量ふ勢の被
傷武者と。特後るまじ撃海ざる。甚作りく斬まぐふ。退崩さく
見回しさま。先我綜麿の量と知らせん。侍ちや来れと正魅ふ。
鐵摧棍を振揮く。決死狂ぬ中川勢を。右側左傾ふ抛傷く。
獅憤と発しく推出せば。これと斜ふ馬と並べく。辨卿又左衛門
久盈。山路将監正国。荒の傷く豹の位く。山路も拉んと突出か
し。三四遍ひど接合しが。山路ハ中川九郎次郎ふ摺り合。拝卿ハ
小七郎ふ突蒐る。これと同時ふ依久間久左衛門安次ハ。中川瀬之
助ふ食ふく。記掬と動し。外石と鳴し。山岳洞渡を瞑まず

ぞう。繞く躍くして暴戦を。中川瀬兵衛清秀ハ。まぐ良欲とも
近海を。孔我相害をふ伝せ。馬ふ任せて近遠るを。依久間玄蕃
が隊中より。走も奔しき若草威ふ。丈丸の槍と節間化ぞし
連寵傳蔵。小田忠次。依用田治平。竹崎伊兵衛と名呼りけ。
清秀見的て捌蒐ると。瀬兵衛熱とくち笑ひ。欲ふ勢とる
毒嵐輩。対欲ふ走ハ不ぞられとも。正魅ふ進ぞし走り
さに。裏途の道の嵐掃せて。去ぞや奉ると血ふ深とる。大左
刀の柄持惹し。左右へ突生連流。小田が。槍の泥尖と諸拗ふ。
斬排ぞる太刀音の手根ふいまぐ剣ね陰ふ。馬方ある連流
傳蔵と。素首絡流と斬蔵し。吻と吹裏と嘘せるやぞ。ちる
の下田平次郎と。頭より脇まで鈴竹破ふ刺ぞる。連流。小田。二人

の屍の。馬より大地へ墜るを待うで。四度目に磐出を太刀先の。佐
用田が突き落さんと。近く。右手と絵の様一斉ふ。斬り拂つば馬上
ふ落ちぬ。横と隱れる地鳴と。一時ふ行清水兵衛と。草搦りけ
る右の高股。鉄骨こす砕著られ。咲と一参死失せり。新と着
るより玄蕃盛政。怒鳴と発しく跳出。深を切りて活捕ぜ。
敵傷が手ふ合ぜるも。吾捉げる這概ふ。よりも満足ふ受ぐと
くべし。先息の根と止るくんと。墨より躍き駒の馬と。陣活
く躍り出。瀬兵衛尉が家臣。敵を見て怒笑ふ。
疲盛政ふ。おくれをるる。後より堂侍る敵あり。森作と云ふ
ふ。佐久間が撃迎撃概を右手ふ拂ふく騎更し。新迎太刀先
盛政が。目速く避んと身を打るを。鞍腰離れく岩退ふ。瀬兵衛

が目當ハ玄蕃が首筋。撃落さんとする太刀を。撃概堅ふ受と匿
守ぐ。つつ太刀後ふて撃概ふ。発止と中る音一斉。金と金との
摩刺ふ。聞き出る火燈の烈敵互の傑精猛られば金鞭之
如落るが。太刀の緩もまと缺墜ふり。二将の闘嘯雙馬の嘶
鳴。ぼ猪八縛の集散離合。尾鞭いとれく面呼乗龍瀑布
ふ粧る後概の。嚴と輝く威と顯ふ。一斜一撃縱横横ふ。
双方修羅ふ甲乙あく。修羅深虚く実くその烈しきこと
火焔の像く。疾と風魔の奏るふ似く。精神ふ沸く。漲く迅
と。勝負も更ふ着えざるころく。佐久間が老黨迫羅兵衛。
記る国敗恐やおもひきん。長様の後を推捻綽中川瀬
兵衛が背後より。突と走進く掛跑ると。清秀躍さぞ顔眄り。

所搏ちんとするところを玄蕃ちゝ髪と雙の腕の。力を極め〻く擊迎鐵倪。避禦こゝ中川が。左の肩へ擊迎まれ宋身裂く持る太刀を揚る力も出ばこそ。其侯馬より横と墜るを。迫藤喜市走進く戒力掣持首掻切り嗚呼惜ひ〻れ中川瀬兵清清秀。捨足蒙求ふ奥りくより古今無欲の和。田伊賀守を擊果せ。武名誠。歳月は鄰輕一統中已。滿の合戦ふ人筆一番の武功を顯し。滝川攻ふも妙辯の。功誉ふ衆と驚るせ〻ぶ天命班ふ。極まりぬるこそ哭き〻る。

（賤嶽の山の尾のふ中川清秀の古城あり 伊香郡賤田の神社といふ中川瀬兵清秀と清項をとゝふ城あり）

備赤中川小七右衛門秀沖い。拝鄰ふ左衛門久盛ふ撰り合。精神根氣の行ん涯極。秘術を彈〻く戦ひ在し。清秀戦死と聆よるも。

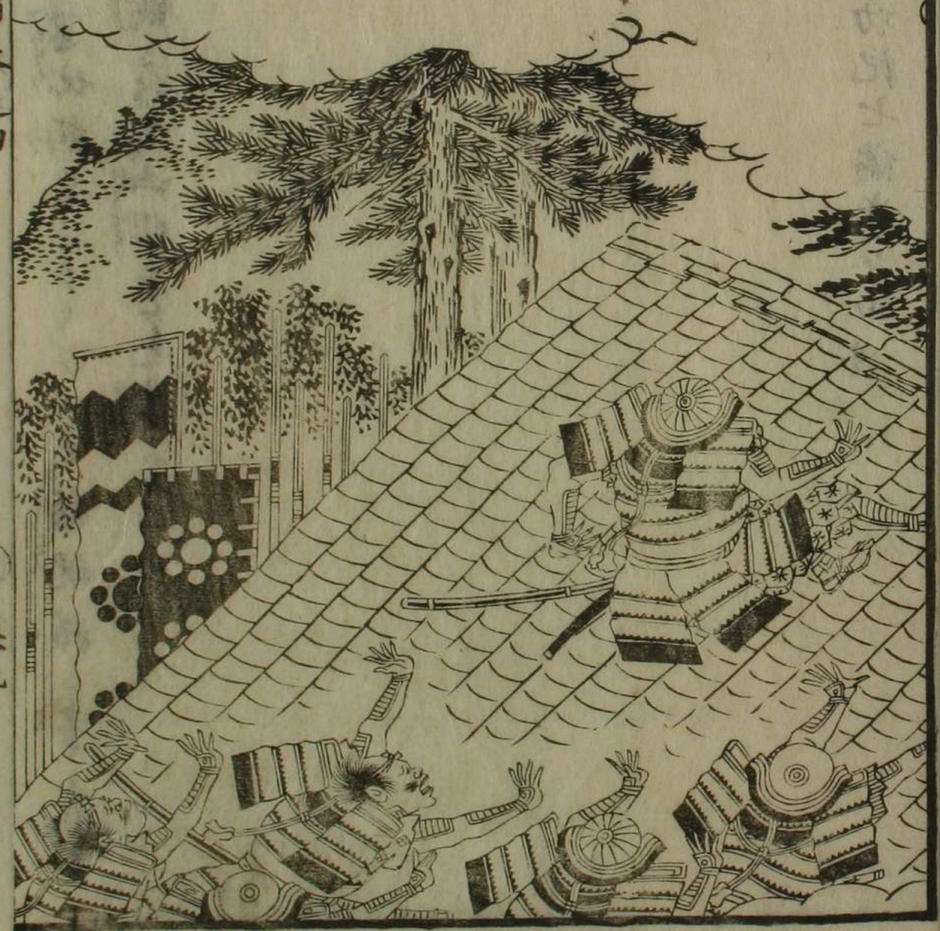
有係ふ骨肉の同胞。なるこの。ものどう脇力の減ぎらんや。漁方忽地擾ふ〻こゝろを。拝鄰ふ勇と懸ち〻遂ふ秀沖を捌壁し。即地ふ前と極所ふ。これと義ぐ山路ふ留ふ。決戦し〻たり〻中川九郎次郎秀之も。清秀。秀沖の擊ふ。今いまや清るも無喜と山路ふ。ふ擊もとり。その外大激辻市浦古田。熊田。ふんとい。ふ長猛士おりひ〻ふ這の山北郡の谷中。死期の戦動いと凄く数と〻く〻く戦死し〻。中ふ一騎殺されるる。中川開之助清滝ハ。強く進んで後攻陽ふ。佐久間久左衛門と戦ひ〻るるも。兄清秀が戦死ふ。弟小七右衛門ふ擊もとり〻も。郎で。ものも〻極威と奮ひ。時移るまで恐戦し〻くるる。兄ふ劣らぬ俊法の猛夫ふ了解の

中川清秀
死に至るまで
進で退らず
流るゝ水の
海に帰るが如し

佐久間久左衛門。おろ〳〵危く看えしが。ようく背深去實
政ぶ。実と跳来るく背方より。響迫太刀浩淵之助が右
方の腕を捻の様一疵。搖落流鳴地砂塵。流注剣く
騎〳〵る馬の。鬣頭に又寸割ぎられば。駭く馬は取ぎら
れ跳る紙面ふ久左衛門。張揚鉾〳〵淵之助ふ。喉を背まで
掛刺〳〵。偖亦中川平右衛門ハ。最茶瀬へ会湯清秀と壁〳〵
遺言せられるるもの。這期ふ迫で死ぬふも死あれば。忠孝ふ
ふと有難〳〵。幸くも死地を逃出ぎの陣へ跳込ぎ。
敵ふ北越の前将。佐久間玄蕃允盛政ハ。大岩山の
枝塞と攻拔。大将中川瀬兵衛清秀。甚外一族老党で。
奮〳〵撃拔られば。流抗ぎること限りなく。除輝と鳴〳〵

三軍ふ奮〳〵令を徇傳へ。凱歌を聲させんと。玄蕃盛
政正猛ふ。本丸の内へ馬を騎拔。陣厰の棟よく跳よ
べ。継いく従兵二十騎ぞ。駆踏ふ〳〵推強る。駒ふ
盛政強張の。扇を飛とおしふき。後ぐ笑口同音
ふ。喚くと叫び紀ふる衆聲の。いまぐ矢ぎふ至〳〵ざる駒。
陣厰の棟梁抵落〳〵と。崩かるふ倉く驚き噪くも
稱つぞその侍ふ。懼怖く跳下り。大膳不敵の玄蕃
ふ。ぞれふ意ふ怖ありけん。本丸より出て凱歌を
唱へ。内中尾ふる勝家ぐ。本陣まで注伸ふ迫び来り。這時
佐久間ぐ駿華の国ふ。清秀の霊膳と。陣厰ふ来る
強火のふ〳〵より。憤怒こ〳〵現る出。棟ふ手とかも折

盛政大岩山ヨリ凱歌ヲ唱ンとまくる晌精灵突情ちく不吉ヲ示ス



よく看えしが。忽地顛倒しうりうこそ。猛魂活る事もやあり
ん。是北軍の敗るべき。凶兆とこそ識たりけり

繪本豊臣勲功記七編卷之四 終